

「学生ボランティア団体活動レポート」

大学名	西南女学院大学
団体名	ちゃれんじ

タイトル：自分自身が楽しんでボランティア活動に参加すること

私たち西南女学院大学「ちゃれんじ」は、障害児とそのきょうだいの余暇活動支援を行う団体である。レクリエーションや遊びを通して、体を動かすことの楽しさを伝えること、肥満予防など健康・体力の維持・増進のために子どものころから運動習慣を身に付けること、保護者同士の交流の場を提供することを活動の主な目的としている。障害児についての障害特性を理解し、障害児だけでなく、そのきょうだい「きょうだい児」と呼ばれる子どもの余暇活動を支援することにも重きを置き、2004年から活動を続けている。

このボランティア活動に参加している学生のほとんどが、保健福祉学部 に在籍しており、看護師や社会福祉士、養護教諭、保育士など、将来人を支援する職業に就きたいと考えている。学生ひとりひとりが、活動の中で支援者としての在り方を学んでいる。

ちゃれんじの大きな特徴は、企画・運営、その後の反省会までを全て学生主体で活動しているところだ。特に、活動後の全体振り返りには力を入れている。ちゃれんじの活動に参加してくれている子どもは、活動に継続して参加している子どもも多い。学生は、顔写真付きの個人データに、毎回担当した子どもについて気づいたことを書き足し、全体で共有する。次の活動が始まる前に、子どもの性格や障害の特性をそのデータから情報収集することができる。そのような個人記録があることで、担当する子どもが変わっても次の活動時、学生と子どもの間にできた信頼関係を壊すことなく、長く子どもが活動に参加しやすい環境を作っている。また、活動は企画ごとにリーダーを決め、学生全員が企画、準備、運営に携わっている。活動内容は、季節感を感じられること、体を動かすものと芸術に触れるものどちらの活動も偏りなく行うこと、その子自身のストレンクス(本来その人が持っている強み)を引き出すことを意識している。他にも、活動中は子ども1人に対し、学生1～2人の体制で活動することを基本にしており、子どもが担当の学生に精一杯甘えられる体制を作っている。

ちゃれんじの活動は、先述したように障害児だけでなく、障害児のきょうだい「きょうだい児」の余暇活動も支援している。障害がある子どものきょうだい児は、障害児であるきょうだいを見て育ち、周囲の大人の真似をしながら支援者として成長している子どももいると私たちは考える。このことに私たちは着目し、障害児もきょうだい児も楽しむことができるプログラムを作成し活動を行っている。よって、障害児だけに学生が付くのではなく、きょうだい児にも担当の学生が1人付き、障害児と同じように学生に甘えられる環境を作っている。障害児は自由に遊べる環境を、そして、きょうだい児にはきょうだいの心配をせず、自分自身がしたい遊びを自由に行うことができる環境を提供するために私たちは活動している。

さらに、活動は参加者の保護者からも好評だ。日頃から一生懸命育児を行う保護者が、ちゃれんじの間だけでも子どもと距離を置き、自分自身の時間を過ごすため、そして、保護者同士で情報共有を行い、保護者同士の居場所を作るためにもちゃれんじというボランティア活動の意義があると考え。短い時間ではあるが、「自分は一人ではない」という気持ちを保護者が感じてくれたらと思っている。障害がある子

どもを持つ親からは、「聴覚障害があるので目が離せないし、周囲の目も気になってしまう」、「多動症なので急にかけ出したり、他の子どもをケガさせないか不安」と言った声が聞かれる。本来、障害があることにより、活動が制限されることはあってはならない。しかし、障害があることにより、思う存分身体を動かすことができない子どももいる。そのため、子どもたちに運動、芸術に触れ合う機会を設け、子どもたちが思う存分楽しめる環境づくりを行っている。保護者から人気の活動は、公共交通機関を使ってのおでかけである。障害児を連れてのおでかけは、体力も多く使うそうで、普段中々、公共交通機関を使って出かけることは難しいと聞いている。そのため、子どもが電車やバスに乗る機会があるおでかけ企画は、子ども自身はもちろんだが、保護者にも喜ばれている。

活動の反省点は、学生がゆえに障害特性の知識が不十分であるということだ。誰一人として同じ人間がないように、同じ障害を持っていても子どもの障害特性や性格はそれぞれ全く異なる。障害特性や障害児について、普段から机上で学んでいる学生が多いにも関わらず、実際に子どもと触れ合ってみないと分からないことは多くある。学生1～2人で子どもを見守る為、安全性の面を気にかけてすぎ、つい「ここは走らないで、そっちに行ってはだめです。」と声をかけている学生が多い。制限をかけることは、子どもの安全性を確保するために必要不可欠であるが、制限をかけ過ぎることは、「障害児やそのきょうだいの遊びの場を提供する」ちゃれんじの本来の目的から遠ざかってしまう。「だめ」といった否定的な表現を使うのではなく、違う選択肢を準備し子ども自身が選択できるようにする必要があると感じる。また、ちゃれんじに参加する子どもの年齢層は、6歳から15歳と幅が広いいため様々な年齢層の子どもが、飽きず、楽しく活動できるプログラムを提供していくことも求められていると思う。活動後の振り返りで見つかる反省点を改善しながら、子ども自身が「また活動に参加したい」と思ってもらえるようにこれからも活動を続けていきたい。

ボランティア活動を通し多くの力を得ることができた。誰かに頼まれてボランティア活動をするのではなく、自主的に活動するからこそ、そこで得た学びを十分に吸収できると私は考える。自分視点ではなく、子どもの表情や仕草、些細なことに気を配り、その状況を考えられるようになったのは、このボランティア活動から得ることができた力である。「誰かのために活動する」という目的をもってボランティア活動に参加することももちろん大切であるが、誰かのためにという目的だけではなく、「自分自身が楽しんでボランティア活動に参加すること」がとても重要なことだと考える。毎日生活し続ける中で気づくことができなかつた、物事の見方や価値観を広げるためにはボランティア活動は必要な活動であると考えている。「あんなことができるんだ」と保護者がこれまで気づくことが無かつた子どものストレングスを学生が引き出し、子どもの笑顔を見ることができたときはとても嬉しく、またやりがいも感じる。こういった経験は、自分から動いて活動に参加しなければ得ることができない。普段、普通に生活していたらめぐり合うことが無かつたかもしれない人とのつながりを感じられ、自らの成長も感じられるボランティア活動はとても魅力的だ。私たちはこの魅力を感じながら、これからも子どもたちの明るい笑顔と共に学生全員で楽しみ、ちゃれんじの活動を続けていきたい。